

第166回くらしの植物苑観察会 2013年1月26日(土)

—都のなかの安らぎ空間—

林部 均(国立歴史民俗博物館 研究部考古研究系 准教授)

大阪で生まれ、大阪で育ち、つい最近まで大阪に住んでいた私にとって、東京は緑が多いと思います。

東京のような大都市では、自然が少ないため、「庭園」のような人工的な自然がつくられるのでしょうか。

こういった人と自然とのかかわりについて、古代の都を例にあげて考えてみたいと思います。

日本にはじめて「京」が成立したのは、今から1300年余り前、飛鳥時代です。飛鳥の「京」です。そして、「京」の成立と、ほぼ同じ頃に、いわゆる「庭園」(苑池)が成立します。

『日本書紀』に拠ると、蘇我馬子は自分の邸宅の中に庭園をつくったので「嶋大臣」と呼ばれました。飛鳥時代はじめてのことです。大規模な方形の池跡が発掘調査でみつかっています。

また、近年、天皇の宮殿である飛鳥宮でも、大規模な苑池遺構が発掘調査されています。大きな石を組み上げた立派な護岸をもつ池がみつかっています。技術的には朝鮮半島の新羅・百済の影響があったといわれています。

それでは、庭園(苑池)と都の成立とは深くかかわるのでしょうか。

中国では苑池は、皇帝の支配領域を視覚的に表現したもので、きわめて政治的な産物でした。皇帝の支配領域の珍しい景観や、そこに生息する珍しい植物や動物が集められました。

どうも、日本の飛鳥時代の庭園(苑池)は、思想的にはこの系譜に位置するようです。

ただ、飛鳥時代、飛鳥では宮殿や寺院の造営が相次ぎ、森林資源が枯渇していました。自然に溢れた環境に都はあったのではなく、はげ山がひろがり、地肌が見える殺伐とした環境の中に都は位置していたのです。だから、当時の天皇や貴族たちは、自然に安らぎを求めたのではないのでしょうか。

だから、私は「京」と呼びうる都市空間の成立と「庭園」の成立がほぼ一致することは、偶然ではないと思います。政争に明け暮れる毎日の中にも、安らぎを求めていたのではないかと思います。

いずれにしても、都のなかの安らぎ空間である「庭園」は、ある特別な人のためだけのものですので、現代の公園や緑地などとは、大きく性格が異なる空間でした。

.....

次回予告 第167回くらしの植物苑観察会 2013年2月23日(土)

「風土記に見える植物」 小倉 慈司(国立歴史民俗博物館 歴史研究系准教授)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要